



SIMOT Research Center NEWSLETTER

No.30 2008.3



- 第4回年次国際シンポジウム報告 特集号

東京工業大学 インスティテューショナル技術経営学リサーチセンターニューズレター

東京工業大学にて、第4回となる国際シンポジウムを2月28、29日の両日開催しました。本シンポジウムでは、センター員による革新的な学術分野の体系化を目指した研究・教育の展開をご報告させていただくとともに、フィンランド・ユバスキュラ大学のアイノ・サリネン学長、イノベティブな企業として世界的に著名な IDEO 社 技術戦略プラクティス ディレクターのデービッド・ブレイクリー氏、シリコンバレーに所在するパロアルト研究センター（PARC）ビジネス開発担当副所長ジョン・ナイツ氏といった産学海外最高権威による最先端の潮流もおうかがいしました。

目次

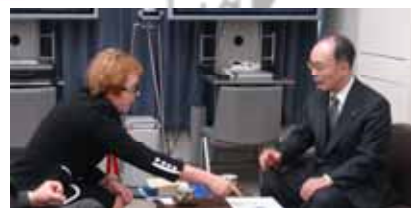
	ページ
● トピック 日・フィンランド学術・文化交流	1
● 特集 第4回年次国際シンポジウム報告	2
● イベント予定	4
● 連絡先	4

トピック

日・フィンランド学術・文化交流：

伊賀 東工大学長・サリネン ユバスキュラ大学学長サミットトーク (2月28日 東工大)

今次シンポジウムでは、招待講演者として、フィンランドの産学連携大学の尖兵であるユバスキュラ大学のアイノ・サリネン学長をお招きしました。同大学は、ヘルシンキの北 200km に位置し、筑波研究学園都市同様の機能を担い、ノキアを始めとする先端企業との産学連携にパイオニア的役割を果たしています。そのような機能ゆえに、かねてから東工大に目を向け、昨年6月には、渡辺センター長を同大学で開催されたフィンランド科学アカデミー基調講演者として招待しました（本 Newsletter 2007年7月号参照）。



議論を交わすアイノ・サリネン ユバスキュラ大学学長および伊賀健一 東工大学長

サリネン学長は、長くユバスキュラ大学の学長を勤め、同時にフィンランドの多くの審議会の要職を担い、同国の科学技術・教育政策に指導的役割を果たしてこられ、今次基調講演に当たっては、本学伊賀健一学長との会談を強く希望されました。

これにこたえて、シンポジウムの初日2月28日に両学長によるサミットトークが本学で行われました。会談は、大学の研究教育・運営戦略からイノベーション戦略、さらには、シベリウスを軸とした文化芸術論にまでおよび、陪席したヘッキ・マキパー在京フィンランドセンター所長をして両サミットの学術・文化的奥行きに驚嘆させました。

このサミットトークをトリガーとして、3月末から3ヶ月の予定で、ユバスキュラ大学情報数理学部のユーホ・ヘッキニン助教が、渡辺センター長の下で客員研究員として「研究開発投資の最適化とイノベーションプロセスのモデル化」の研究指導を受けることになりました。同助教は、来日後早速、3月31日に研究・技術計画学会国際問題分科会で「フィンランドにおける産学連携による共同研究開発」について講演することになっています（本 Newsletter 巻末「イベント予定参照」）。

特集 第4回年次国際シンポジウム



講演

今次シンポジウムは、招待講演、ゼネラルセッションおよびブラウンバッグ・セッションにより構成され、センター員が研究の進捗を報告するとともに、SIMOT 分野の世界の第一人者による最先端の講演が行われました。



SIMOT では、「イノベーションとインスティテューション」に関する理論および方法論の深化を図ることを目的に、国内外の企業・研究機関で活躍する学者・ビジネスリーダーを毎年招聘し、講演をいただいております。今年はいノ・サリネン フィンランド・ユバスキュラ大学 学長、デービッド・ブレイクリー IDEO ディレクター、ジョン・ナイツ PARC 副所長の3名の方々にご講演いただきました。

大学、イノベーションおよび競争力：
フィンランドの事例研究

イノベーションに向けた文化の
醸成

シリコンバレーにおける地域イン
スティテューションとそのイノベー
ション環境へのインパクト

アイノ・サリネン
フィンランド
ユバスキュラ大学 学長



フィンランドがいかにして世界有数の Knowledge Economy を確立したかというテーマで、そのイノベーションシステムおよび基盤となる教育システムを、フィンランド随一の教育機関たるユバスキュラ大学学長の立場からご紹介いただきました。

デービッド・ブレイク
リー
IDEO ディレクター



IDEO が提唱する企業イノベーションの醸成に必要な4つの留意点について紹介され、IDEO で実際に行っている、企業との協調によるイノベーションの創造から製品化までのプロセスを具体的に示されました。

ジョン・ナイツ
PARC 副所長



副所長を務める PARC を事例とした、シリコンバレーにおけるイノベーション創生の歴史的プロセスと地域インスティテューションの共進について紹介され、そこにおける教育機関の役割について強調されました。

SIMOT 研究報告

SIMOT リサーチセンター員による研究の進捗および深化を主に、(1)市場と技術の相互作用メカニズム、(2)イノベーションサイクルの体系化、(3)社会的インスティテューションの歴史的示唆、の3つの観点から報告いたしました。

(1) 第一軸 - 市場と技術の相互作用メカニズム

ITの進展に伴う社会の変容により、従来受動的であった消費者がアクティブな参加者へと変貌しました。本セッションでは、「国家戦略・社会制度」の観点から、変容する市場において、組織がどのように変わるべきか、すなわち、インスティテューショナル・イノベーションのシステムについての提言を行いました。また、その具体的な例として、ハイブリッドマネジメントの技術、そしていかにそのメカニズムが持続可能な発展の為に、イノベーションと共進的に機能しているのか、について紹介を行いました。



イノベーションとインスティテューションとの共進化：日本型共進化ダイナミズム-ハイブリッド技術経営による「東西」の融合
渡辺 千仍
東工大 経営工学専攻 教授
SIMOT リサーチセンター長



イノベーションシステムとインスティテューションの進化
宮崎 久美子
東工大 イノベーションマネジメント研究科 教授



情報システムとインスティテューショナルイノベーション
チャラ・グリフィー・ブラウ
ン・ミッパ・グーデン大学准教授

挨拶・ゼネラル・チェアおよびセッション・チェア

1日目



伊賀 健一
(東工大学長)



肥田野 登
(社会理工学研究科長)



梅室博行
(センター員)



中原恒雄氏
(SIMOT 評議委員
長)



保々雅世
(SIMOT 特任教授)



比嘉邦彦
(センター員)



村木正昭
(センター員)



フォー・G・ブラウ
ン (共同研究者)



伊澤 達夫
(東工大副学長)



妹尾大
(センター員)



宮崎久美子
(センター員)



伊藤謙治
(センター員)



京本直樹
(事業推進協力)



水野真治
(センター員)

2日目

(2) 第二軸 - イノベーション創出サイクルの体系化

本セッションでは、オペレーションレベルの観点から、イノベーション創出サイクルの体系化について、日本型の「ものづくり文化と品質管理の本質」に焦点をあてて議論を行いました。ITの進展に伴う社会の変容に即した新しい日本型品質管理の提唱とともに、企業の知的財産戦略およびIT利活用と企業インスティテューションとの共進ダイナミズムについて事例に基づき紹介・提案を行いました。

ものづくり文化と品質管理の本質



オペレーションズマネジメントと文化
 圓川 隆夫
 東工大 経営工学専攻 教授
 イノベーションマネジメント研究科長
 SIMOT 副センター長



社会調和共進型 SCM
 曹 徳弼
 慶應義塾大学 管理工学 教授
 SIMOT 特任教授



IT利活用とインスティテューション

SOAは必然か？

飯島 淳一
 東工大 経営工学専攻 教授

企業の知的財産戦略



経営に資する知的財産活動
 田中 義敏
 東工大 イノベーションマネジメント研究科 准教授



バイオベンチャーの知的財産活用
 佐伯 とも子
 東工大 イノベーションマネジメント研究科 教授



ワークプレイスとインスティテューション
 妹尾 大
 東工大 経営工学専攻 准教授

(3) 第三軸 - 社会的インスティテューションの歴史的示唆

本セッションでは、歴史的俯瞰に立脚した社会的インスティテューションの歴史的示唆について、「国家戦略・社会制度」と「企業組織・風土」に焦点をあてて議論を行いました。戦前、戦後の日本の技術発展、研究体制とインスティテューションとの関係性および現在の日本 / 比較対象国の企業行動について事例を踏まえて紹介・提案を行いました。

日本の技術・研究発展動向



チソの技術開発とInstitutionalなもの(社会的諸制度の構造)
 木本 忠昭
 東工大 経営工学専攻 教授



日本の基礎科学振興政策
 山崎 正勝
 東工大 経営工学専攻 教授



現代日本の企業行動



日本におけるアクティビズムの台頭と買収防衛策の導入
 蜂谷 豊彦
 東工大 経営工学専攻 准教授



中国における台湾食品メーカーの製販統合型経営
 鍾 淑玲
 東工大 経営工学専攻 准教授



製造業のサービス化・ブランド化
 菊池 隆
 東工大 SIMOT 特任教授

パネルディスカッション

今次パネルディスカッションでは、議論の焦点として、「日本企業は、日本のインスティテューションにおいて国際競争力を維持・強化できるのか？」を挙げ、歴史的な視点、マクロ・ミクロの視点、提言の方向性について議論しました。拠点リーダー、サブリーダーをはじめとするセンター員によるSIMOTの視点からの討論を中心に、フロアーからもコメントを求めつつ、日本企業・日本社会の今後およびSIMOT研究の統合について意見を戦わせました。



ブラウンバッグ・セッション (BBS) SIMOT 若手先端研究報告および SIMOT 教育の共進化

SIMOT では、国際的最先端若手研究者をポスドクとして採用する他、国内の優れた博士課程学生を「スーパードクター」としてその研究を支援しております。今次 BBS 1 日目においては、若手研究者主導の下、彼らの一年間の研究成果報告を行いました。また、2 日目においては、SIMOT 教育の一環として、SIMOT 中核講義 (インスティテューショナル技術経営第一・第二) の受講生のうちの 6 名によるパネルディスカッションを行いました。参加自由のブラウンバッグセッション形式の本パネルディスカッションは、連日満席となる大盛況で、産官学多様な分野からの貴重なご意見・議論をいただくことが出来、若手研究者・学生たちにとって貴重な体験となりました。



最近の動き

● 海外出張

- 田中 3月 6日~13日 インド デリー (デリー大学・インド工科大学で講義、
商工業省および知的財産権庁を訪問調査)
- 3月 13日~15日 バングラデッシュ (工業省を訪問調査)
- 渡辺 4月 5日~9日 アラブ首長国連邦 ドバイ (IAMOT)
- 4月 25日~5月 7日 オーストリア ウィーン (国際応用システム分析研究所 (IIASA))

イベント予定

平成19年度後期 SIMOT RA・ポスドク研究報告会

日時 3月 25日 (火) 13:00 - 16:40
場所 東京工業大学 西9号館 311号室

研究・技術計画学会 国際問題分科会 3月例会

日時 3月 31日 (月) 18:00 - 21:00
場所 東京工業大学 百年記念館 第1会議室
テーマ フィンランドにおける産学連携による共同研究開発 - インスティテューショナル技術経営学への示唆
講師 ユーホ ヘッキニン 氏 (東京工業大学 客員研究員 フィンランド ユバスキュラ大学 数理情報工学部)



● ● 発行 ● ●



東京工業大学 21世紀 COE プログラム
「インスティテューショナル技術経営学」SIMOT 事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1 W9-51
東京工業大学大学院社会理工学研究科経営工学専攻内
西9号館 208B号室
TEL: 03-5734-2936 FAX: 03-5734-2250
Email: yoshino.m.ad@m.titech.ac.jp
URL: <http://www.me.titech.ac.jp/coe/>
編集者: 菊池 隆